

# Hara Museum of Contemporary Art

## MERCEDES-BENZ ART SCOPE

メルセデス・ベンツ アート・スコープ 2015-2017

### 漂泊する想像力

出品作家：泉太郎 | メンヤ・ステヴェンソン | 佐藤時啓

2017年5月27日[土] — 8月27日[日] 原美術館 [東京・品川]



《図版1》佐藤時啓「An hour exposure 1990/2017 Tokyo - Shibuya」2017年 写真/2点組

#### ●「メルセデス・ベンツ アート・スコープ」とは

原美術館が2003年からパートナーをつとめる「メルセデス・ベンツ アート・スコープ」は、日本とドイツの間で現代美術アーティストを交換して交流をはかるメルセデス・ベンツ日本の文化・芸術支援活動で、1991年から続いています。(詳細は p.3 を参照)

#### ●日本から2名、ドイツから1名が新作を発表

本展に参加する3名は揃って新作を発表します——**泉太郎** (いずみ・たろう/2016年ベルリンへ派遣) はどこか不思議な映像インスタレーションを、**メンヤ・ステヴェンソン** (Menja Stevenson/2015年東京へ招聘) は「Japan」の現在と伝統の中から着想を得た写真やモノタイプなど多彩な作品を、そして招待出品の**佐藤時啓** (さとう・ときひろ/1993年「アート・スコープ」に参加) は、90年代に一度作品化した東京の街を再び(しかし違う手法で)撮影した写真作品で、過去と現在を対置します。(詳細は p.2 を参照)

#### ●どんな展覧会か

作風・スタイルは異なりますが、3名のアーティストはいずれも本展に向けた制作のためにカメラを持って街へ出ました。東京あるいはベルリン——街の中を漂泊するアーティストの想像力が創り出す三者三様の世界をご鑑賞ください。

## ●出品アーティストと作品について

### 泉太郎 (映像インスタレーション) ——映像を織り交ぜてどこかおかしい空間を創り出す



泉太郎は映像作品・映像インスタレーションやドローイングを制作し、自分自身のパフォーマンスをビデオに収めることも多いですが、他の出演者を起用する作品もあります。映像は、《意味》と《無意味》を往来するような《ゲーム》あるいは《プレイ》を思わせる行為＝パフォーマンスを映し出し、現実と虚構の境界が曖昧になるような奇妙さがあります。「くすっと笑ってしまう」感覚と「首をかしげたくなる」感覚が交錯する泉太郎の作品は、社会の底にある無意識や習慣、明瞭あるいは暗黙の規則や約束事を露わにしたり、相対化するものと言えるでしょう。本展ではベルリン滞在中に撮影した動画素材を使った作品や、「空の旅」体験に想を得た新作の映像インスタレーションを出品。

《プロフィール》 1976年奈良県出身。多摩美術大学院美術研究科修士課程修了。「ヨコハマトリエンナーレ 2011」など、国内外で多数の展覧会に参加。また、原美術館で開催したグループ展「ウィンター・ガーデン：日本現代美術におけるマイクロポップ的想像力の展開」(2009)にも出品。本年2月からはパリのパレ・ド・トーキョーで個展「Taro Izumi-Pan」を開催。東京都在住。

### メンヤ・ステヴェンソン (写真、モノタイプなど) ——異文化の《いにしえ》と《いま》を観察する



ドイツ南部のシュトゥットガルトを拠点とするメンヤ・ステヴェンソンの作品は、映像・写真・ドローイング・オブジェなど多岐にわたりますが、「発見」と「収集」が特徴と言えます。日常の細部に見つけた些細な物や事象をさまざまなメディアで記録したり、少し変えたりしながら、時には自分自身によるパフォーマンスもくわえて作品化していきます。今回は初来日ということもあり、まずカメラを持って東京を散策し、その日常的断片を写真で収集しながらイメージへと変換していくと同時に、《Japan=異文化》の伝統である浮世絵木版画から想を得て、少しひねったモノタイプ(版画)のシリーズを制作しました。一見抽象的で色彩豊かなモノタイプは、同時に「伝統」という積み重ねられた時間の厚みを映し出します。

《プロフィール》 1982年ドイツのバーデン＝ヴュルテンベルク州ロットヴァイル出身。シュトゥットガルト造形芸術アカデミーで美術とメディアアートを学ぶ。写真・映像・パフォーマンス・インスタレーションなど作品は多彩。シュトゥットガルト在住。

### 佐藤時啓 (写真) ——カメラで切り取る《自分》と《東京》のビフォー／アフター



佐藤時啓はまさに Photography (直訳：光で描く絵) を実践する作家です。作品の第一印象は上記2作家と異なりますが、80-90年代の代表的なシリーズ「光一呼吸」は、カメラの前で自ら身体的パフォーマンスを繰り広げる点で共通しています。これは、東京をはじめ内外のさまざまな場所に赴き、長時間露光で撮影することで動き続ける自らの姿を写真には残さず、手に持った鏡の反射光やライトの光の軌跡のみを記録した幻想的な作品です。それは現実を《写す》のではなく、人の眼で知覚するのは違うイメージに《ずらし》、《移す》ものと言えます。本展では、90年代初頭に「光一呼吸」で撮影した東京の同じ場所をもう一度(しかし違う手法で)撮影し、自己の表現と東京の姿それぞれの新旧を対照させます。

《プロフィール》 1957年山形県出身。東京藝術大学大学院美術研究科修了。芸術選奨文部科学大臣賞(2015)など、受賞多数。美術館での個展は東京都写真美術館(2014)、アメリカ・シカゴ美術館(2005)など多数。また、原美術館で開催したグループ展「空間・時間・記憶-Photography and Beyond in Japan」(1994、のち北米3カ国に巡回)、『『アート・スコープ』の12年-アーティスト・イン・レジデンスを読み解く』(2003)、「そこにある、時間-ドイツ銀行コレクションの現代写真」(2015)にそれぞれ出品。埼玉県在住。東京藝術大学教授。

## ●「メルセデス・ベンツ アート・スコープ」について補足

このプログラムは1991年に「アート・スコープ」の名称で始まり、原美術館は2003年からパートナーとなりました。そして今回から名称を「メルセデス・ベンツ アート・スコープ」と改め、装いを新たにしました。

プログラムの骨子は、現代美術の発展と日欧文化交流促進の一助として(1)日本のアーティストにはベルリンで、ドイツのアーティストには東京で、それぞれ約3ヶ月間の《アーティスト・イン・レジデンス》を体験してもらう、(2)その成果を踏まえた参加アーティストの合同展覧会を原美術館が企画・開催する、というものです。

今回から、プログラム名称を改めると同時に、展覧会では、直近の派遣・招聘アーティストに加えて、ゲストとして過去の参加アーティストから1名に出品依頼することとしました。「アート・スコープ」参加以後もキャリアを積み重ねている招待作家の近作を通して、四半世紀を越えて継続する本プログラムの歴史と変遷を検証できることと思います。

なお、アーティスト・イン・レジデンスとは、あるアーティストが一定期間滞在して制作活動あるいは制作のためのリサーチ・研究を行いながら、滞在先で交流を深めるプログラムのことで、世界各国で盛んに行われています。日本国内では1990年代以降、主に自治体やNPO等が受け皿となって活発化し、現在に至っています。

## ●原美術館とのパートナーシップの歴史

原美術館がこれまでに開催してきた「アート・スコープ」の展覧会と出品作家は下記の通りです(年代降順)

2014年

《「アート・スコープ2012-2014」—旅の後もしくは痕》

今村遼佑、大野智史、  
リタ・ヘンゼン、ベネディクト・パーテンハイマー

2011年

《「アート・スコープ2009-2011」—インヴィジブル・メモリーズ》

小泉明郎、佐伯洋江、  
エヴァ・ベレンデス、ヤン・シャルルマン

2008年

《「アート・スコープ2007/2008」—存在を見つめて》★

加藤泉、照屋勇賢、  
エヴァ・テッペ、アスカン・ピンカーネル

2006年

《「アート・スコープ2005/2006」—インターフェース・コンプレックス》★

森弘治、名和晃平、  
カーチャ・シュトルンツ、ゲオルグ・ヴィンター

2005年

《「アート・スコープ2004」—Cityscape into Art》

荘司美智子、ヨハネス・ヴォンザイファー

また、原美術館がパートナーとなる以前の「アート・スコープ」は、日本作家の派遣のみ行うプログラムで、アーティスト・イン・レジデンスの場所は南仏モンフランカンでした。この時期の参加作家は次の通りです(年代降順)。

高橋信行(2002)、秋山さやか(2001)、前沢知子(2000)、伊庭靖子(1999)、小林孝亘(1998)、鯨津朝子(1997)、  
邱世源(1996)、江上計太(1995)、岡崎乾二郎(1994)、**佐藤時啓(1993)**、柏木弘(1992)、増田聡子(1991)

原美術館ではパートナーシップ締結を機に、2003年、この12作家による展覧会《「アート・スコープ」の12年—アーティスト・イン・レジデンスを読み解く》★を開催しました。

なお、★印の展覧会は、ダイムラーグループがベルリンで運営する現代美術ギャラリー「ダイムラー・コンテンポラリー Daimler Contemporary」にて巡回展を行いました。

## ●関連イベント

### 【1】アーティストトーク（予約制、申し込み先着順）

2017年5月27日 [土] 2:00 - 4:00 pm 原美術館ザ・ホールにて

出演者：泉太郎、メンヤ・ステヴェンソン、佐藤時啓 / 司会：安田篤生 [原美術館副館長 / 学芸統括]

※予約方法・受付開始日時などの詳細はホームページ、ブログでご確認ください。

### 【2】ワークショップ（予約制、申し込み先着順）

会期中に出品作家の佐藤時啓による親子で参加できる体験型ワークショップを行います。詳しい内容・日時ならびに参加費、申し込み方法は原美術館ホームページ、ブログ等で後日発表します。

## ●展覧会カタログ

本展カタログは展示の記録写真（インスタレーションビュー）を掲載したもので、会期中での発行となります。

オールカラー、日本語・英語併記。その他詳細は後日発表します。

## ●品川駅高輪口から無料送迎シャトル運行（会期中の土・日・祝日）

メルセデス・ベンツVクラスにて品川駅高輪口（JR/京急）と原美術館の間を運行いたします。毎便定員6名。乗り場・運行時刻等の詳細はウェブサイト・ブログをご参照ください。

**H A R A**  
**MUSEUM**



## ●開催要項

展覧会名：メルセデス・ベンツ アート・スコープ 2015-2017—漂泊する想像力

英語名称：Mercedes-Benz Art Scope 2015-2017: Wandering to Wonder

会期：2017年5月27日 [土] - 8月27日 [日] 開催日数=80日

会場：原美術館

主催：原美術館、メルセデス・ベンツ日本株式会社

後援：ドイツ連邦共和国大使館

企画協力 / レジデンス・プログラム：NPO 法人アーツイニシアティブトウキョウ [AIT/エイト]

開館時間：11:00 am - 5:00 pm（水曜は 8:00 pm まで / 入館は閉館時刻の 30 分前まで）

休館日：月曜（祝日にあたる 7月17日は開館）、7月18日

入館料：一般 1,100 円、大高生 700 円、小中生 500 円 / 原美術館メンバーは無料、学期中の土曜日は小中高生の入館無料 / 20名以上の団体は 1人 100円引

交通案内：JR「品川駅」高輪口より徒歩 15分 / タクシー 5分 / 都営バス「反 96」系統「御殿山」停留所下車、徒歩 3分 / 京急線「北品川駅」より徒歩 8分 / 会期中土・日・祝、品川駅高輪口（JR/京急）と原美術館の間を無料送迎シャトル運行（メルセデス・ベンツVクラス、毎便定員6名）。詳細はウェブサイトへ。

\* 日曜・祝日には当館学芸員によるギャラリーガイドを実施（2:30 pmより 30分程度）

原美術館

住所 東京都品川区北品川 4-7-25 〒140-0001

Tel 03-3445-0651（代表）

E-mail info@haramuseum.or.jp

ウェブサイト <http://www.haramuseum.or.jp>

ブログ <http://www.art-it.asia/u/HaraMuseum>

携帯サイト <http://mobile.haramuseum.or.jp>

Twitter <http://twitter.com/haramuseum>

●**広報用図版**—各図版のトリミング、文字載せ不可。必ずクレジットをご記載ください。



《2》



《4》



《3》



《5》



《6》

《図版1》 佐藤時啓「An hour exposure 1990/2017 Tokyo - Shibuya」2017年 写真/2点組

《図版2》 佐藤時啓「An hour exposure 2017 Tokyo - Akihabara」2017年 写真

《図版3》 メンヤ・ステヴェンソン「I would like to be come cat」2017年 写真 70 x 100 cm

《図版4》 メンヤ・ステヴェンソン「e / The Master's Table」2015年 モノタイプ/12点組より 各191 x 97 cm

《図版5》 泉太郎 パレ・ド・トーキョー（パリ）での個展 2017年（参考図版） ©Taro Izumi Courtesy of Galerie GP & N Vallois, Paris and Take Ninagawa, Tokyo 撮影：André Morin 写真提供：Palais de Tokyo

《図版6》 泉太郎「見えない星からの突き刺さるウィンク」2017年（参考図版）

※注 図版1~4 は本展に出品予定。図版5・6 は本展に出品されません。作品の著作権は各アーティストに帰属します。

■本展取材・広報用図版提供に関するお問い合わせ：

NPO 法人アーツイニシアティヴトウキョウ [AIT/エイト] 肥田、依田

Tel 03-5489-7277 Fax 03-3780-0266 Eメール [press@a-i-t.net](mailto:press@a-i-t.net)

■原美術館に関するお問い合わせ：原美術館 広報 松浦、野田

Tel 03-3280-0679（直通） Fax 03-5791-7630（直通） Eメール [press@haramuseum.or.jp](mailto:press@haramuseum.or.jp)